

日本ラテンアメリカ学会 会 報

№. 4 4

1993年2月28日

第44号 目 次

1. LASAへの加入91名に
2. 理事会報告
3. 研究部会報告
4. 会員活動報告
5. 学術・文化情報
6. 近着会員業績
7. 事務局から

1. LASAへの加入91名に

昨年12月25日を締切日として、受け付けていたLASA(米国ラテンアメリカ学会)への団体加入申し込みは、驚くほどの反応があり、総数91名にのぼった。締切を1月23日の理事会開催日まで延期し、LASAへの送金と取り次ぎを行った。91名という数は、現会員の4分の1に相当する。

申込者の内訳は、教授等27名、助教授等44名、大学院生等20名、計91名である。分野別では、歴史26名、人類学、経済学各13名、文学9名、政治学8名、国際関係7名、地理学5名、社会学4名など。関心地域では、メキシコ43名、ブラジル21名、ペルー20名、アルゼンチン13名、チリ10名、中米8名、ボリビア、キューバ各7名、グアテマラ6名などであった。

現在1件が積み残しになっているが、3月末日を締切日として第2次申し込みを受け付ける。希望者は、事務局宛に用紙などを請求して欲しい。本年度限りの割引初年度会費は、教授等30ドル、助教授等25ドル、大学院生等20ドルであるが、送金コストを(より少ない人数の)受益者負担でまかなうので、ドル換算レートは、前回より多少高めめの133円とし

ます。(事務局運営委員 横山)

国際交流ネットワーク作りへの 協力をお願い

昨年9月のLASA大会の折、日本に関心を持つラテンアメリカ人またはラテンアメリカ研究者のネットワークを作る準備として、該当する研究者についての調査を日米両学会関係者が協力しておこなうことが合意された。対象となるのは、ラテンアメリカ研究者で日本ないし日本・ラテンアメリカ関係に関心をもつ者、およびラテンアメリカ人の日本研究者ないし日本滞在(長期)経験者である。該当者に心当たりのある会員は、その研究者の氏名、出身国、専門分野、現職、研究テーマ、現住所、日本側受入れ機関・受入れ者を、幡谷則子までお知らせ下さい。ファックス番号は03-3226-8475、住所は東京都新宿区市谷本村町42番地 アジア経済研究所(03-3353-4231)

(恒川)

2. 理事会報告

○第59回理事会報告

日 時:1993年1月23日(土)

場 所:アジア経済研究所

出席者:山田、アンドラーデ、石井、加茂、
恒川、堀坂、三田、高橋(書記)
(委任 中川(和)、大貫)

1. 第14回大会準備について

記念講演者としてW・コーネリアス博士
(米カリフォルニア大学サンディエゴ校)

に決定。旅費・滞在費を考慮して講師謝礼を5万円とした。

シンポジウム・分科会等について議論があり、準備委員会に引き継がれた。予算は例年通り40万円とし、準備委員会の企画次第では10万円まで増額することとした。

2. LASA団体加入について

理事長より、反響が大きく会員91名から応募があり、送金等手続きが進行中である旨の報告があった。第2次募集を検討することとした。(記事1「LASAへの加入91名に」を参照)

3. 会報第44号の発行について報告があった。

今後、修士・博士論文情報の掲載を検討することとなった。

4. 年報編集について報告があった。

論文・研究ノート申し込み11点のうち12月末までに10点が到着し、それぞれ審査委員に審査を委嘱した。

5. 各部会の研究会開催計画が報告された。

6. LASAタスクフォースより、日本に関心があるか、あるいは日本の研究機関に一定期間滞在したことのあるラテンアメリカ人研究者リストの作成に関する報告があった。(記事「国際交流ネットワーク作りへの協力をお願い」を参照)

7. 理事選挙規則改正について

前回事務選出で検討課題となった理事と地域の関係の問題に関して、全国区・地方区に定員を振り分ける等の案が次回総会で審議に向けて検討中である旨理事長より報告があった。

8. 新入会員6名および退会3名が承認された。(記事7「事務局から」を参照)

賛助会員岩波書店の退会希望が報告された。

3. 研究部会報告

○東日本部会

1992年度第1回東日本部会は11月7日、上智大学L524会議室において午後2時から5時半まで行われた。(出席者20名)

今回の共通テーマは「90年代のラテンアメリカを展望する」というもので、そのために80年代以前の各国の足跡を再検討しようという試みであった。報告者は、谷洋之(上智大学大学院)、岸川毅(同イベロアメリカ研究所)、および中川智彦(ジャパンエコー)の3名で、谷・岸川による「新自由主義経済政策のメキシコ社会への影響—農民と都市低所得者層—」と、中川による「チリにおける『資本主義革命』とその遺産—ピノチェット軍事政権の歴史的役割に関する試論」の2つの報告があった。各報告の要旨は以下のとおりである。

○第1報告：「新自由主義経済政策のメキシコ社会への影響」

デラマドリ政権以降とられてきた新自由主義経済政策が、メキシコにおける貧困と所得格差を増大させ、メキシコ社会の底辺たる農民と都市低所得者層の生活を逼迫させてきた。この現状に対し、現サリナス政権が打ち出したのが「国民連帯計画(PRONASOL)」である。PRONASOLは民衆の自発性を高め参加民主主義を実現させつつ貧困の問題を解決することを目標としている。本報告では農業部門および都市部門の各視点から現政権の新自由主義政策の検討が行われた。

まず、谷は新自由主義政策の理論的背景を概観した後、デラマドリ政権下の農民の生活、および農業生産基盤への打撃を考察した。さらに、現サリナス政権が進める一連の新自由主義政策を憲法27条の修正、NAFTA(北米自由貿易協定)、PRONASOLを例に位置づけ、それらのメキシコ農村への影響を検討した。

すなわち、憲法27条の修正によりエヒードを中心とする農業部門の分化が一層強化されるが、NAFTAの枠内で促進される商業化の恩恵を受ける層と、PRONASOLの枠内で「救済」される層とがでてくると考えられる。よって一見ポピュリズム的に解釈されるPRONASOLも含め、一連の経済政策はひとつの体系を形成している。さらに、サリナス政権は自発性を強調するPRONASOLによって以上の政策体系から脱落しつつある伝統的な

農業部門の「意識の近代化」を目論んでいるのではないか、というのが報告者谷の解釈である。

引き続き、岸川は都市低所得者居住地域（コロニア・ポプラル）の一つであるバジェ・デ・チャルコの事例を取り上げ、そこでのPRONASOLの実施状況を紹介した。PRONASOLの重点地域となっている同コロニアの都市サービスは確かに改善され、「正常化」により住民の多くは土地を取得している。一方、その結果として1991年選挙におけるPRIの得票も伸びている。すなわち、民主主義の質が問われることになる。

政治の近代化・民主化を目指すサリナス政権であるが、少なくとも対コロニア政策に関しては伝統的なポピュリズムやクライアンティリズムが復活し、票集めという目先の目標が優先されている、というのが岸川の批判的分析である。

○第2報告：「チリにおける『資本主義革命』とその遺産」

1973年軍事クーデター以降、民政移管までの16年半の間に、チリ経済は対外的には国際競争力をつけ外国資本にとって魅力ある市場を提供するに至ったが、国内的には貧富の差が拡大し社会の分断をもたらした。

本報告では、まずピノチェット政権を、単なる反革命・反動政権としてではなく、徹底した市場原理の導入と国際経済体制への再編入による資本主義的再建という歴史的役割を担おうとした「革命的」政権としての位置づけがなされた。その上で、過去40年来の介入主義国家の解体を目指した「資本主義革命家」達のクーデター以降のヘゲモニー獲得の軌跡を追い、さらに1982年危機後の変化と連続性を考察しつつ、軍政の残した正負両面の遺産を確認するという試みがなされた。中川によれば、二極化した社会の統合的發展をめざした、バランスのとれた開発戦略・調整様式の模索・実践が1990年代チリの課題となっている。

第1報告については、PRONASOLによっ

てめざされたのはむしろ政治改革ではなかったか、またNAFTAによってもたらされる農業商業化促進という図式は楽観的に過ぎないか、等の指摘があった。第2報告については、ピノチェット軍政の特異性、ポスト・ケインズ主義という意味での社会民主主義の再評価等をめぐって議論が展開された。両報告とも、自由主義経済体制下で出現した敗者の救済政策を模索した、80年代ラテンアメリカの一面を捉えたものとして総括された。

（文責：幡谷）

○中部日本部会

これまで西日本部会の一部として取り扱われてきた中部日本部会が、研究者の増加などの事情から1992年度より独立し、今回あらたに中部日本研究部会として発足した。その新設後初の研究会が11月28日（土）午後2時より南山大学において開催された。記念すべき第1回の研究会ということもあって、当日は東北や関西からの参加者も含め計19名の研究者・学生が出席し、まずまずの盛況であった。会は3時間にわたり、2つの研究報告とそれらに関する活発な質疑応答と議論が行われ、午後5時すぎに閉会した。発表報告は、紙面の都合で各報告者のレジュメをもとに作成した。

○第1報告：「植民地時代末期のプエノスアイレス商人—研究方法を探るために—」

坂野鉄也（名古屋大学大学院）

従来、プエノスアイレス商人に関しては研究の中で言及されることはあっても、体系的に研究されることはなかった。このような状況の中でSusan M. Socolowによって初めて商人に関して体系的な研究が行われた。彼女の研究視点は、商人集団をひとつの社会集団とみなし、その集団としての社会・経済・宗教・政治における役割を体系的に探るというものであった。またこのような研究の視点を導入した結果、従来体系的には使われてこなかった資料、例えば、遺言、教区記録、裁判記録などを用いて研究を行った。さらに、研究方法としてプロソポグラフィを導入した。

しかし、この研究によっても解決されずに残された問題が数多く存在する。これらの問題はプロソポグラフィを徹底すること、従来行われてきたような社会・経済・宗教・政治という枠組みの中での実証的研究を進めることが同時に行われることによって、解決されると思われる。さらに、法制度という枠組みの中でモデル形成と実証的研究を同時に行うという方法も必要であると思われる。

○第2報告：「北米自由貿易協定とメキシコの民営化政策—企業グループの行動を中心に—」

安原 毅（南山大学）

サリナス政権下で進められてきた銀行民営化政策とは、モンテレイ系グループを初めとする企業グループを再編、強化する政策でもあった。これは更に、メキシコ企業の海外での資金調達、買い取った銀行株の国際市場での売却等を利用した点で、企業グループのグローバル化と結び付いた過程であった。

メキシコ企業のグローバル化とは、現在資金調達に止まらず、米国・欧州企業の買収により世界的に経営を拡大する者も現れている。北米自由貿易協定NAFTAの調停に際し彼らは同国政府に様々な要求を提示してきたし、サリナス大統領も自らの主導で米墨両国の企業家団体を結成し、利害調整に当たらせている。

この点からメキシコにとってのNAFTAとは、資金調達・経営両面での企業グループの海外進出を制度的に追認するものと考えられ、同国「国民経済」の対外開放化といったタームでは理解されないものといえる。

（文責：二村）

○西日本部会

11月7日（土）同志社大学において『ラテンアメリカにおける文学と政治』をテーマとする西日本部会研究会が開かれ、高林則明（京都外国語大学）の司会で下記の2つの報告がなされた。参加者は14名であった。

○第1報告：バルガス＝リョサにおける文学と政治について

立林良一（同志社大学）

学生時代から30代前半までは、サルトルの思想的な影響もあって積極的にマルクス主義を支持する立場を貫いてきたリョサであるが、1971年のキューバにおけるパディージャ事件を機に徐々にその姿勢が変化していく。それはカミュやバーリンの思想に対する共鳴にも読み取ることができるが、73年に発表された『パンタレオン大尉と女たち』に現れた作風の変化もそのことと無縁ではない。

60年代の重厚でシリアスな小説から一変してユーモアを全面に打ち出した『パンタレオン』は、単一の価値観に縛られた人間の狂気ともいうべき姿を滑稽に描き出しているが、ユーモアが多様な価値観を容認することのできる心のしなやかさを前提にしていると考えれば、この時期にリョサの内部で起きた思想的な変化がこうした作品を生み出すひとつのきっかけになったことは間違いないであろう（詳しくは『「パンタレオン大尉と女たち」におけるユーモア』『同志社外国文学研究』64号を参照）。

○第2報告：亡命中に書かれる文学

—チリの場合を中心に—

今井洋子（京都産業大学）

チリでは1973年のクーデターより始まるピノチェ軍事政権は1990年の総選挙で完全に終わりを告げた。そこで今回は亡命していた作家たちのこの期間の作品を取り上げて検証する。自身が亡命作家であり、評論家でもあるフェルナンド・アレグリアの説を参考に、亡命文学作品を3つの時期、段階に分けてみた上で、それぞれの作品の評価を試みた。

第1段階：祖国で起きた悲劇の記録、証言の類を書く

第2段階：異郷にいる自分自身を含む亡命者や、祖国に留まった人々のことを書く

第3段階：新天地で祖国に縛られない、より普遍的な題材を見つけて書く
チリの4人の代表的な亡命作家の亡命にま

つわる作品を以下のように整理することができる。

1. ホセ・ドノソの場合……『別荘』(1978) 第1段階、『隣家の庭』(1981) 第2段階、『絶望』(1986) 第1・2段階。
2. ホルヘ・エドワーズの場合……『好ましからぬ人物』(1973) 第1段階、『接待役』(1987) 第2段階。
3. イサベル・アジェンデの場合……『精霊たちの家』(1982) 第1段階、『エバ・ルナ』(1987) 第3段階、『*El plan infinito*』(1991) 第3段階。
4. アントニオ・スカルメタの場合……『燃える忍耐』(1986) 第1段階、『何も起こらなかった』(1980) 第2段階。

西日本部会の春季研究会

テーマ「日系外国人労働者の現状」
 3月6日(土)14時—
 大阪経済大学(阪急京都線上新庄駅下車)
 ☎06-328-2431 当日大学構内に
 会場の案内有
 報告者 アンジェロ・アキミツ・イシイ
 「ブラジル日系出稼ぎ労働者の生活実態と異文化接触」
 山本直子 「外国人労働者と保証人バンク」

4. 会員活動報告

○文部省「科研費」採択課題

平成4年度における文部省科学研究費補助金制度の国際学術研究として採択された中南米関連の研究課題は次のとおりである。

| 分野 | 研究代表者 | | 人数 (うち 外国人) | 調査国 | 研究課題名 |
|----|-----------------|-------|-------------------|-------------------------------|--|
| | 機関・部局・職 | 氏名 | | | |
| 理 | 東大・理・教授 | 釜江 常好 | 13 (3) | ブラジル | 気球による活動銀河核等からの硬X線・ガンマ線の調査研究 |
| 人 | 静岡大・人文・教授 | 前山 隆 | 6 (2) | ブラジル、トリニダード・トバゴ | アジア系ラテンアメリカ人の民族性と国民統合—民族集団間の協調と相克に関する研究— |
| 医 | 高知医科大・医・助教授 | 橋口 義久 | 10 (2) | エクアドル、パラグアイ | 中南米におけるリーシュマニア症とその伝播に関する研究 |
| 医 | 杏林大学・医・教授 | 辻 守康 | 9 (2) | ブラジル | 中南米の寄生吸虫症、特にブラジルにおける肺吸虫症の病態生理学的研究 |
| 人 | 国立民族学博物館・第四研・教授 | 友枝 啓泰 | 10 (5) | ペルー | 高地アンデス都市の民族学的研究 |
| 農 | 宮城教育大・教育・教授 | 伊澤 紘生 | 8 (2) | コロンビア、アメリカ | 新世界ザルの通時的な社会構造とその生息環境である熱帯雨林の動態に関する研究 |
| 農 | 筑波大・生物科学系・助教授 | 原 慶明 | 6 (2) | オーストラリア、アメリカ、メキシコ | マングローブ環境下における微細藻、大型藻の比較分類学 |
| 農 | 東大・教養・助教授 | 矢原 徹一 | 6 (3) | アメリカ、ブラジル、エクアドル | 新大陸産キク科ヒヨドリバナ属近縁植物の分子系統学的研究 |
| 理 | 九州大・理・教授 | 北村 泰一 | 18 (7) | ブラジル、オーストラリア、カメルーン、インドネシア、ペルー | 中緯度から赤道域にわたる超高層大気へのエネルギー輸送と変換過程 |

5. 学術・文化情報

○LASA第18回大会

LASA (米国ラテンアメリカ学会) 第18回アトランタ大会は、学会誌LASAフォーラムによると、1994年3月10-13日の開催予定で、The Americas and the Globalization Process: Trends and Strategies for the New Millenniumがメイン・テーマとなります。大会プログラムの責任者(Program Chair)は、University at AlbanyのProf. Edna Acosta-Belénです。Program Committeeのもとに以下の15のSection (カッコ内はSection Chair)が設けられています。5月15日までにProgram Chairの下に発表プログラムの素案が提出され、9月には発表される予定です。連絡先は: LASA '94 Program Committee Chair, Edna Acosta-Belén, Center for Latin America and the Caribbean (CELAC), SS-248, University at Albany, SUNY, Albany, NY 12222. Program Office Tel. (518) 442-4590; FAX (518) 442-4017. CELAC/LACS Tel. (518) 442-4890; FAX (518) 442-4790. E-Mail: EA180@ALBNYVM1

- Agrarian Issues, Indigenous Groups, and Social Movements (Marc Edelman, Anthropology, Yale University)
- Caribbean (A. Lynn Bolles, Women's Studies, University of Maryland)
- Central America (Astrid Fischel, San José, Costa Rica)
- Democracy and Human Rights (Marcelo Cavarozzi, FLACSO)
- Economy and Economic Development (Carlos E. Santiago, Economics, University at Albany)
- Environment (Richard Norgaard, Energy and Resources Group, University of California, Berkeley)
- History and Historical Processes (Teresa Meade, History, Union College)
- Interamerican Relations and Integration (Bruce Bagley, GSIS, University of Miami)
- Literature and Art (Marina Pianca, Latin American Studies, University of California, Riverside)
- Mexico (Nora Hamilton, Political Science, University of Southern California)
- Politics and Public Policy (Sonia Alvarez, Politics, University of California, Santa Cruz)
- Scholarly Resources (Peter T. Johnson, Library, Princeton University)
- South America (Francisco Leal Buitrago, Instituto de Estudios Políticos y Relaciones Internacionales, Universidad Nacional de Colombia)
- Urban and Labor Studies (Edward C. Epstein, Political Science, University of Utah)

○ラテンアメリカ社会学会第19回大会

ラテンアメリカ社会学会 (ALAS) の第19回大会が、5月30日から6月4日の予定でカラカスにて開催される。大会のテーマは、Políticas Sociales, Desarrollo y Viabilidad Democráticaである。15に及ぶセッションと7つのラウンドテーブルが予定されている。連絡先は: XIX CONGRESO LATINO AMERICANO DE SOCIOLOGIA

- Correo electrónico: elander@dino.conicit.ve
Edgardo Lander-Instituto de Investigaciones Económicas y Sociales, UCV
Caracas, Venezuela.
- Correo Ordinario, FAX:
Comite Ejecutivo XIX Congreso

ALAS

Soc. Julieta Mirabal

Apartado 51.927

Caracas 1050, Venezuela

FAX: (58-2) 751-26-91 CENDES-

UCV (Centro de Estudios del
Desarrollo)

FAX: (58-2) 662-95-21 FACES-UCV

(Facultad de Ciencias Econo-
micas y Sociales)

FAX: (58-2) 662-69-70 LIS-UCV

6. 近着会員業績

〔籍〕鈴木讓二『日本人出稼ぎ移民』平凡社、1992年。

〔抜〕青木芳夫「獵師と牝鹿（ニカラグアの民話2）」ラテンアメリカ資料センター『資料ラテンアメリカ特集シリーズ10』1992年9月。

〔抜〕同上「ダンプニ（ニカラグアの民話3）」ラテンアメリカ資料センター『資料ラテンアメリカ特集シリーズ11』1992年10月。

〔籍〕三田千代子・奥山恭子編『ラテンアメリカ家族と社会』新評論、1992年。

〔抜〕角川雅樹「フランス領ギアナ」東海大学留学生教育センター『人間の場から』第29号、1992年12月。

〔抜〕同上“Sentimientos Inferiores”, *Plural, Revista Cultural de Excelsior* No. 229, Octubre de 1990, México.

〔抜〕同上「ラテンアメリカにおける家族の心理 — 特にメキシコの家族について」『ラテンアメリカ家族と社会』新評論、1992年。

〔抜〕同上「メキシコの子精神保健専門家に対する森田療法の紹介・啓蒙活動」メンタルヘルス岡本記念財団『研究助成報告集』第4号、平成4年12月。

〔抜〕村上勇介「ペルーの国家と社会に関する一考察」『外務省調査月報』1992年No.1。

〔冊〕宮西照夫 報告書 国際シンポジウム

「古代マヤ文明と幻覚剤」

〔籍〕浅香幸枝共編訳『世界昔ばなし・上・ヨーロッパ』講談社（文庫）、1991年。

〔籍〕同上『世界昔ばなし・下・アジア・アフリカ・アメリカ』（同上）

〔抜〕同上「社会変動と家族 — ペルーにおける家族の変遷 —」『名古屋聖霊短期大学紀要』第10号、1991年3月。

〔抜〕同上“Ermilo Abreu Gómez y Nacimiento de la Literatura Infantil Mexicana”, *Cuadernos CANELA Vol. II, Confederación Académica Nippón-España-Latinoamérica*, mayo, 1991.

〔抜〕同上「トランスナショナル・エスニシティと国際協力 — パンアメリカン日系協会における国際協力に関する一考察 —」日本国際政治学会『国際政治 ラテンアメリカ — 1980年代の国際関係と政治 —』第98号、1991年10月。

〔籍〕大串和雄『軍と革命 — ペルー軍事政権の研究』東京大学出版会、1993年。

7. 事務局から

1) 寄贈図書

〔籍〕Gōzō Yoshimas, *Ostiris, o deus de pedra*, 吉増剛造詩集「オシリス、石の神」ポルトガル語版、Tradução Antônio Nojiri, Aliança Cultural Brasil-Japão, 1992.

Sophia University, Ibero-American Institute Library, *Accession List*, No. 119, Nov. - Dec. 1992.

2) 新入会員（第59回理事会承認）

編集後記

今年は国際先住民年である。ラテンアメリカでも、原住民の生活に影響を及ぼす資源開発に日系の企業が関わっているような場合も少なくないようだ。日本においてラテンアメリカ研究に従事する我々としても、アイヌの問題と同時にラテンアメリカの原住民の問題を自分たちに直接関わる問題として見直して行くきっかけになれば、と思う。

私事になるが、在外研究のため3月始めから10カ月間チリに行き日本を留守にします。チリではカトリック大学に籍を置き、原住民マプーチェの歴史および、前回留学時の宗教民謡研究でやり残したことを中心に研究してくる予定です。 (千葉)

会報に関するご意見や情報、記事は下記の各編集委員へお寄せください。

堀坂浩太郎 (理事)、飯島みどり、
山岡加奈子

No.44

1993年2月28日発行

〒305 茨城県つくば市天王台1-1

筑波大学歴史人間学系山田睦男研究室内

日本ラテンアメリカ学会事務局

☎・Fax 0298-53-4034

郵便振替口座 宇都宮 8-10994